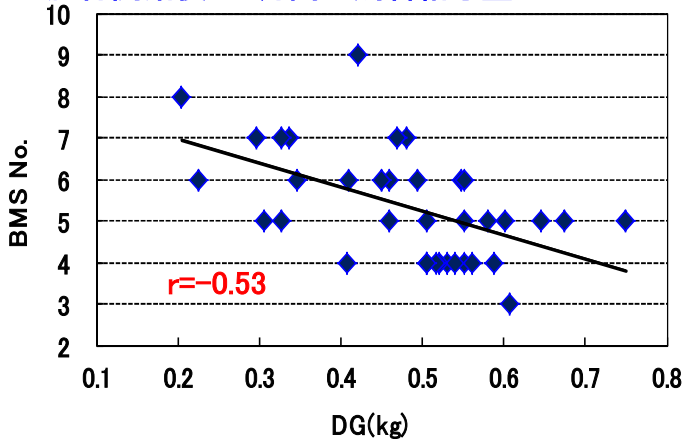
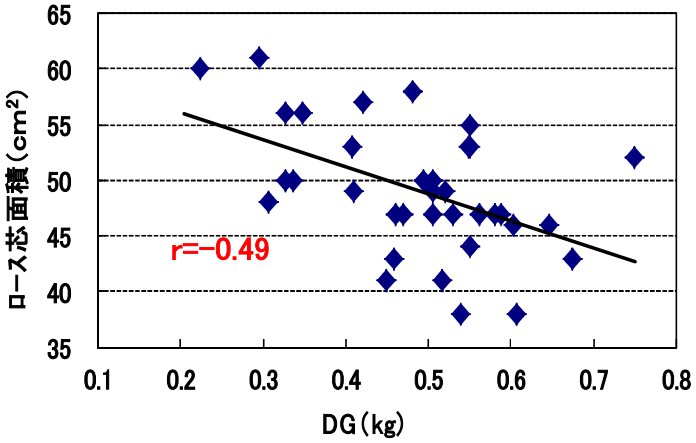
但馬牛雌牛の肥育特性

【背景・目的・成果】
　雌牛は去勢牛に比べて産肉性が劣り、枝肉販売価格が去勢牛よりも安いため、子牛市場での価格も雌子牛が去勢子牛よりも安値となり、繁殖農家の経営を不安定にしています。
　そこで、但馬牛雌牛の肥育特性を明らかにするために、雌牛の肥育試験成績と市場データを解析した結果、但馬牛雌牛の産肉性向上のポイントとして、肥育開始後3か月間の飼料給与量と出荷月齢が重要であることが分かりました。

肥育開始後3か月間の飼料給与量



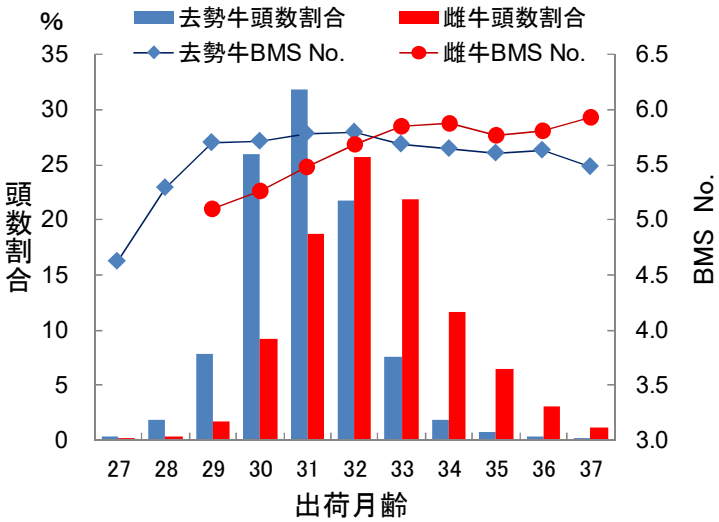
肥育開始3か月間のDGとBMS No.の関係



肥育開始3か月間のDGとロース芯面積の関係

- これまでの研究成果から、去勢牛では肥育前期(9～14か月齢)の1日増体量(DG)を0.7kg程度に制限すると産肉性が良くなることが分かっています。
- 雌牛では肥育開始後3か月間のDGと脂肪交雑(BMS No.)およびロース芯面積の間に負の相関が認められ、DGを0.5kg以下に制限すると、BMS No.が増加し、ロース芯面積も大きくなることが分かりました。
- 雌牛では肥育前期の前半は発育を去勢牛よりも抑え、後半は去勢牛と同程度まで上げると産肉性が向上することが分かりました。

出荷月齢と出荷頭数およびBMS No.の関係



出荷月齢と出荷頭数およびBMS No.の関係

- 出荷月齢ごとの頭数割合は、去勢牛では31か月齢、雌牛では32か月齢で最も多く出荷されています。
- 出荷月齢ごとのBMS No.は、去勢牛では29か月齢で横ばい状態となり、33か月齢以降やや減少し、雌牛では33か月齢まで大きく増加し、それ以降も漸増しています。
- 但馬牛肥育牛の肉質が安定する出荷月齢は、去勢牛の29か月齢に対して雌牛では33か月齢であることが分かりました。

【技術の活用】 但馬牛雌肥育マニュアルの作成に活用し、神戸ビーフ率の向上を図ります。

兵庫県 Hyogo Prefecture
兵庫県立農林水産技術総合センター
畜産技術センター